

西之島計測結果へのコメント（東京大学地震研究所 中田節也教授）

面積の縮小は、新たに海中に流入する溶岩が減少したことにより、波浪による侵食が新たな溶岩による陸地面積の拡大を上回ったためと思われます。

海面上の体積が増加したのは、溶岩の流出率の低下によって粘性が上がったため、溶岩チューブ（表面が固まった溶岩の内側を溶岩が遠方まで流れ、活動停止後にはチューブ状の空洞になる）の中を海岸まで流れるのではなく、地表面だけを流れるものとなり、溶岩等の厚みが増したためと考えられます。

最高標高が低下したのは、粘性が上がったため噴火がより爆発的となり、火口径が拡大したためと考えられます。

東京大学地震研究所の衛星赤外面像解析では、9月下旬から次第に熱量が低下し、12月の始めにはほとんどバックグラウンドに近い値となっています。このことは国土地理院の計測結果（流出速度低下）と一致しています。

なお、中田節也教授は、火山噴火予知連絡会西之島総合観測班班長を務めています。

気象庁 火山噴火予知連絡会ホームページより

http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/STOCK/kaisetsu/CCPVE/meibo_20151001.pdf